ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える

ふるさと〝風〟

第202号（２０２３年７月）夏号

（会報発行月：4・7・10・1月）

常世の風に吹かれて呟いて（9）　白井啓治

（故白井啓治氏の過去の記事から一部を抜粋して連載しています。）

『猛暑本番ハイビスカスの花鮮やかに』

（２０１３年７月７日）

辛く長い夏が始まった。
冷房嫌いのお猫様とお犬様の攻防に板挟み。
適当にバランスを取りながら、エアコンをつけたり消したり。
この暑さの中、縁側の鉢植えのハイビスカスは元気に鮮やかな花を咲かせている。
どうやらこのハイビスカスはお猫さまの味方のようだ。じゃあ二対二のおあいこであるが、最終のジャッジは小生の役割。
これからおよそ二か月、三人での攻防だ。
夕方、急な雷と大粒の雨。お蔭で外の空気は涼しくなって来た。今夜は七夕であるが、どうやら天の川は見られそうもない。

『人生の表現に老いの言葉はいらない』

（２０１３年７月１２日）

人生の表現に老いの言葉はいらない
ただ今夜中の０時３５分。
東京から戻ってきたところである。
ヨネヤママコ聖女のパンカゴの公演に出かけてきた。ママコさんの歌を聴くのは初めてであったが、実に若々しい声であったのと、今の年齢にしか表現のできない物語の秘めた歌に驚かされた。
小生ももう老人だと言わないで、老人の枯れた表現を見に来なさいよ、と胸を張って言いたいものである。

（絵：　兼平智恵子）

『遠くに雷の声　一雨来て熱した土を冷やせ』

（２０１３年７月１４日）

ゲリラ豪雨の注意報が出ているが、こちらにはやって来ないのだろうか。
雷の声が遠くに聞こえるが雨は降るのだろうか。
兎に角一度熱せられた大地に水をまいて冷やしてほしいものだ。集中的豪雨は困るのだが…。
都合の良いことを思ってしまうのだが、この毎日の暑さを抑えるには少し多めの雨が有難い。
朝から湿度が高く不快な一日になった。
こんな陽気に元気なのは藪っ蚊とお猫様だけである。
庭に出るのに短パン、半袖では決して出られない。ちょっとオオバを数枚と思ってそのまま出たらもう数カ所喰われて痒いこと痒いこと。折角オオバを刻み込んで素麺をと思ったが、痒さのあまり素麺の味を褒めるのもそこそこに胃の中に注ぎ込んでしまった。
蒸し暑さに小生とお犬様はへばっているのだが、お猫様は快適快調らしい。風の当たらぬ窓辺にまったりと寝ていて、そばを通る度、ねえお庭に行こう、と甘えた声でミューと呼ぶ。
今日はエアコンを点けないつもりに居たが結局スイッチ・オン。
夏は始まったばかりなのだけれど、夏は嫌だ。

ふるさと風の会会員募集中！

当会では、「ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える」仲間達を募集しております。自分達の住む国の暮らしと文化について真面目に考え、声高くふるさとを語り、考える方々の入会をお待ちしております。
会の集まりは、1・4・7・10 月初めに会報作りを兼ねた懇親会と各月末に雑談：勉強会を行っております。
会費は月額 1,500 円。（会報印刷等の諸経費）
※入会に関するお問い合わせは下記会員まで。

木下明男　090-4715-5527　兼平智恵子　0299-26-7178
伊東弓子　0299-26-1659　木村　進　080-3381-0297
編集事務局　〒315-0014　石岡市国府 4-3-32（木村）
HP　http://www.furusato-kaze.com/

ふたつのローカル線

兼平智惠子

当会報の前回四月号に紹介しました一つ目の、ひたちなか湊線に続いて今回は二つ目のローカル線をお伝えします。

それは石岡市内にかつて存在していた鹿島参宮鉄道です。

明治十五年七月二十七日生まれの浜平右衛門さんは年少にして父並びに祖父を失い、学業を断念し家業の醤油醸造業を継ぎました。明治四十二年一月(二十六歳)には石岡醤油醸造組合長となり、さらに新治郡醤油醸造組合長に就任。その後も数々の役職を歴任され、明治四十五年一月には地方の電化事業に着目し石岡電気株式会社を創立。のちの昭和六年には茨城電気株式会社として創立し、社長に就任。

つぎに県東南の未開発地域の交通事業に尽力し、大正十四年九月には鹿島参宮鉄道株式会社を創立して、その社長となりました。

一方明治四十三年五月石岡町町議会議員となり、大正十四年九月には貴族院多額納税議員に選出される。産業経済界における多年の功績により、大正十三年四月産業組合中央会より、緑綬功労賞、昭和十年五月紅綬功労賞をうける。昭和九年三月満州国功労賞、昭和十年十二月勲四等瑞宝章を授賞。昭和四年茨城県下特別大演習の際、水戸大本営において産業功労者として単独拝謁(お目どおり)の光栄(名誉)に浴した(受ける)。名実ともに茨城県産業経済界の重鎮(じゅうちん)であった。以上、鹿島参宮鉄道の創立者　浜平右衛門さんの足跡をたどって見ました。

鹿島神宮への参宮鉄道として計画されたとも言われている鹿島参宮鉄道は、石岡駅から鉾田駅までの約二十七キロ。全通したのは、昭和四年(一九二九)の五月の事でした。現在の行方市出身の私は玉造駅を利用していました。

八木蒔駅を過ぎると広がる霞ヶ浦を前にしての紫峰の山筑波山が姿をあらわします。ガタゴトとゆったり走るガソリンカー(当時私達の通称)。旧玉川村に住む私にとって、憧れである都会、石岡や土浦や東京行きへの架け橋となってくれた大切な有り難いガソリンカーでした。

時代は進み昭和四十年(一九六五)には常総筑波鉄道と合併し関東鉄道鉾田線となり、更に昭和五十四年(一九七九)には関東鉄道鉾田線は鹿島鉄道線とかわりました。

平成の世になり益々の車社会にはいり、平成十四年(二〇〇二)には貨物輸送営業廃止となる。

やがて私の大切なガソリンカーは平成十九年(二〇〇七)三月三十一日役目を終了してしまいました。しかし終了の年の四月より、旧鉄道線にほぼ沿った形で路線(国道三五五線)バス「かしてつバス」の運行を開始、代替交通を確保しました。

尚線路跡地、石岡駅から常陸小川駅(小美玉市)間は線路を取り去った後、茨城空港、百里飛行場へのバス専用道路「かしてつバス専用道」となり、平成二十二年(二〇一〇)八月三十日より、専用道路経由のバスの運行が開始されました。

皆さん、どうぞ石岡駅から「かしてつバス」に乗って茨城空港へ！飛行機の発着の見学やお食事、お買い物、そして空港から約一キロのところの「そらら」までのウォーキング楽しんでみませんか。

また常陸小川駅からは小美玉市の小川南病院に保存されている懐かしい「鹿島鉄道キハ４３２」にウオーキングで会いに行く(約一・五キロ)。

尚、鹿島鉄道のファンの皆さんには「鹿島鉄道キハ６０１とＫＲ５０５」は鉾田市のホットパーク鉾田に保存されている事お伝えします。

小川南病院：キハ 432

ホットパーク鉾田：キハ 601＆KR505

石岡の『みんなのタロー』

それは、昭和三十九年鹿島参宮鉄道の玉造駅から石岡駅内で起きた、石岡の幼稚園に通う女の子と可愛いがられていた犬との悲しい別れでした。

玉造駅から石岡の幼稚園に通う女の子を送り迎えしていたコロ(四十五年後に名がわかる)はある時、女の子と一緒に鉄道に乗ってしまいました。

迷い犬になってしまったコロ。傷だらけになったコロは石岡の東小学校の用務員の娘さんに助け出されました。

やがてコロは東小学校の子供さんたちと遊ぶようになり、タローと名付けられ、優しくおとなしいタローは児童や先生、学校関係者の誰にでも、

マスコットのように可愛いがられていました。
　タローの一日は、午前は毎朝校門の周辺で子供達を迎え、それから何故か一年生のクラスを訪問、三クラスあったので順に見て回り、八時三十分を過ぎると必ず駅へ向う。午後からは三時三十分にでかけました。それは昭和四十年頃から始まり、雨の日も嵐の日も、横断歩道は一旦止まり、歩道橋は駆け上がり、踏み切りを渡り、交通ルールを守り一度も事故に会わず通い続けました。しかし、ついに女の子に合うことなく昭和五十六年七月二〇日、十八年の生涯を終えました。
　以上今泉文彦著「あした会えるさ」より参考にさせて頂きました。
　タローが待ち続けていた主人が判明したのは、タロー没後二八年後、平成二十一年（二〇〇九）五月九日朝日新聞の記事で、閉ざされた記憶の扉が開けられたそうです。
　現在、完成した映画『石岡タロー』の上映、試写会についての問い合わせ先は「いしおかタロー」フィルムパートナーズ　石坂アツシ　電話０９０・１０５０・００６６になっております。
　多くの人に与えたタローの溢れる優しさに触れてみたいとおもいます。

○油断大敵四十七の息子襲うコロナ　　智恵子

我が人生の回想13

ギター文化館誕生まで・・・②

木下明男

　30年は長いようだが、石岡は歴史の街と言われているように古い繋がりがある。
最近石岡市内有力者との付き合いが多くある。その中で語られるのは、２代３代前に、此の石岡に来た由来等を話してくれる。北陸や関西、東北や甲信越から数代前の祖先が石岡で事業を起こす話です。　今の年齢ではなく、数十年なんて、まるで小僧っ子扱いです？　有力者たちが、互いに自らの出生を語り、故郷を自慢し合うのは聞いていて面白い？　この人たちも、根っからの石岡人ではないのだ？
　八郷では、親鸞以降（８００年前）の住民は新住民？　だとか。確かに親鸞は、稲田の西念寺にて20年に亘り布教活動を続けたらしい。其の事を挙げて、祖先自慢を仕会うらしいのだ。
また空海も、同時期八郷（大覚寺）での布教歴等もあるようです？？？　常陸の国風土記の勉強を、ふるさと風の会でしています。本編（解説書）の記述は雑駁ですが、この辺り（常陸の国＝茨城）のことが記されており興味深い。講師でもあるＫさんの話は、現地の地理や伝え等も織り交ぜ分かり易い。
　こんな事から見ると、30年なんてまだまだ最近のことと思うが、それでも長い歴史の始まりかもしれない？　30年前に出来上がったギター館、地元では何がやってきたか不安で一杯だったようです。その時期騒がれた〝オーム真理教〟などもあり、サティアンだとか？　音楽堂？　オッパイ堂（子供たちが形を見て）とか言われていた様です。東京のギターショップ社長Ｍさん、現地ギタリストのＩさん、大阪のギター名器オーナーのＨさんらが活躍していた。出来上がったギター館をどのように運営するか・・・。
　ギター館開設が、メディア等により（新聞やテレビ等）大々的に報道され、音楽界、クラシックギターの世界やフラメンコの世界では大きな騒ぎとなっていく。地元のギター教室でも（荻津節男・中村俊三・木村義輝）関りを求めて・・・。
新規開設のギター館は、当初土日のみの会館、ミニコンサート等を実施。
関東の各地（埼玉・千葉・栃木・群馬・東京・茨城）から・多くのボランティアが（ギターを愛する会）週末に集まり、運営に関わってくれた。
関西からは、ギター製作家の松村雅亘氏や北口功氏、地元からは飯田明氏、近隣市からは高野行進氏、富山幸男氏、井上学氏・・・の先生が協力してくれる。
元レナウンや日立関係の幹部職のギター愛好者が協力で専従員に・・・。

地域に眠る埋もれた歴史（90）　木村　進

【民俗芸能と祭り】（４）

真家みたまおどり

　平安時代から続くと言う石岡真家地区で行われている盆踊り「みたまおどり」を以前見た時の記事を載せます。朝８時スタートというので明円寺へ行ってみると駐車場は少ししか空いていません

でしたが寺の駐車場に止めることができました。

くりこみ（提灯）を先頭に花笠マトイ、ミドシ、虎の皮、トウシン、軍配サイマラ、ビンザサラ、踊り子、太鼓、笛、歌い手の順に入場します。おどりは「ホーイホイ」という掛け声で始まります。（この踊りの歌は、旧八郷町誌（古い版）に載っていたと思います。興味のある方は図書館で見てください）

明円寺の入口の上り階段のところを並んで登ってきます。カメラマンは年々増えて朝早いためか年配者ばかり。私もそのひとりには違いないが、あまり一緒にいたくない。写真というよりも伝えたいものがいつもあるので、どうも噛み合わないことが多いのです。皇室への献上柿の産地として知られる「真家地区」比較的子供も多いようです。

この踊りは平安時代に始められた盆踊りで、新盆の家を1件ずつまわって輪の周りを踊るものです。国選択無形民俗文化財に指定されています。歴史的にも大変興味があるのですが、現在は変わった盆踊りとして伝わっているだけと感じてしまいます。主役は子たちです。　たくさんのカメラマンに狙われていました。このスタート地点となる「明円寺」は親鸞の弟子「明法房」の明と「弁円」の円をとって名付けられています。

山伏弁円は有名な山伏でしたが、親鸞が稲田の草庵にいて日増しに評判が良くなってくるのを妬ましく感じて、ついに親鸞を襲います。

しかし、親鸞の態度と言葉にたちまち改心して弟子となり「明法房」と名乗りました。（この話は大覚寺に残されています）

この踊りを私は3年続けて見物している。

そして水戸から筑波山への参詣街道であった「瀬戸井街道」がこの横を通っていたことを知ることができた。そして、この祭りを見る目も少し変わってきたように思う。

常行三昧会（西蓮寺）

9月24日から30日までの7日間、行方市の西蓮寺で毎年、常行三昧会（じょうぎょうざんまい え）が行われています。その中日に籠行列も行われると聞いて見物に行ってやってきました。

一般に伝えられているところによると、常行(三昧)堂は、阿弥陀如来を祀り、その廻りを門徒僧侶たちが何日間も読経して廻るという修行のことで、天台宗では本来は阿弥陀如来の後ろに「摩多羅神（またらじん）」（後戸の神）が置かれていて、これが翁などの能楽の基になったと言われています。この摩多羅神に興味があったのですが、この常行堂には摩多羅神が置かれているかどうかは確認できませんでした。

西蓮寺の常行堂の中に、「びんづるさま」が置かれていました。どこか悪いところがあれば、その部分をなぜると治ると言われているものです。

一般にはインドの仏教で賓頭盧(びんづる)尊者とわれる仏陀の弟子（十六羅漢の第一位）で、日本の各地でも「びんづるさま」として親しまれています。でも、ここでは少し違った解釈がされています。なにしろ「びんづるおばあちゃん」というのですから驚きです。また後でお話ししましょう。

この常行堂の裏に廻って見ました。

僧侶の方はこちらから出這入りするようです。

そしてここに張られた紙を見ると、2時間置きに僧侶たちは入れ替わっているようです。

さて、この常行堂の御本尊の薬師如来像は別な薬師堂（隣の保管蔵）に祀られています。こちらも祭り期間中は公開されています。

近隣のたくさんの信者の方などが来られていまし

た。数千円で記帳して蝋燭とお札をもらい、名前を書いた紙が後に張られます。年配の女性の方も杖をつきながら、たくさん来ておられました。この金網の向こうに如来三尊が置かれ、その前を読経しながら僧侶が一人ずつまわります。観音像の前で一礼し、これを延々と続けていきます。

さて、行方市などで紹介している資料によると、この寺は、「寛治年間（1087～94）に地元の長者が比叡山より移したものとされ、西蓮寺の末寺、門徒寺の僧侶が常行堂に集まり、9月24日～30日の7日7夜にわたって堂内を廻りながら独特の節回しで立行誦経する大法要です。」となっています。この辺りはまたもう少し掘り下げて見たいと思います。

この常行三昧会（じょうぎょうざんまいえ）には近隣の寺からもたくさんの僧侶が参加して、数体の阿弥陀如来像が祀られている廻りを読経して休みなくぐるぐる回り、修行の場となっています。同時に近隣からたくさんの信者の方が訪れて、「仏立て（ほとけだて）」という行事も行われます。普段は開放されないこれらのお堂の仏像も開帳されます。常行三昧堂は天台宗の中心である比叡山延暦寺などの修行の中心となる寺院に造られています。この修行が通常は90日間も行う厳しいものだったようですが、ここでは現在は7日間だけ行われています。そして、この常行三昧堂の阿弥陀如来の後ろに「後戸の神」といわれる「摩多羅神（まだらじん）」（能楽の神？）が中世には置かれていたのではないかとも思うのですが、いろいろこの寺について書かれたものを見てもその記述はありません。それこそ翁の面をかぶった神楽のような舞でもあればその存在を考えるのですが、まったくその気配もありません。7日間の三昧会の初日・中日・最終日の3回に昼の12時から平安時代を思わせる駕籠行列が行われます。

十二時近くなり、常行堂と境内の反対側にある「客殿」前に駕籠が準備され、僧侶が法螺貝などを手にして整列を始めました。ここから真直ぐ前の常行堂に向かって行列が始まりました。先頭は拍子木を鳴らし、その後ろから法螺貝を吹く僧侶が続きます。

最後に4人に担がれた駕籠が行きます。駕籠には大僧正？が乗っています。

弘安の役(元寇)の戦勝を記念して建立したと伝えられる相輪と樹齢約1000年以上といわれるイチョウの大木の間を通ります。行列は常行堂の正面から外側を廻って裏の入口に到着し、ここから中に入ります。駕籠がこの裏の入口に横付けされ、駕籠から大僧正が下りてきました。そして階段を上り、常行堂の中に入って行きました。

堂の正面には阿弥陀三尊、その左手にこの阿弥陀如来様があります。恐らく昔はこんな行列での行事はなかったのでしょうが、いつから始まったものなのかはよくわかりませんでした。

さて、この（尸羅慶台上山）西蓮寺（天台宗）の創建はかなり古く、782年（延暦元年）に桓武天皇の勅命によって最仙によって創建されたと伝えられています。最仙上人は最澄（伝教大師）の弟子といわれる僧侶で、常陸国の関城（真壁郡）に生まれ、最初は徳一法師と同じ法相宗に属していたとされます。そして、常陸国分寺、国分尼寺の僧尼などに経典を講義する講師（こうじ）に任ぜられた人物です。常陸国ではこの西蓮寺の他、筑波四面薬師と言われる「東城寺」「椎尾薬師」なども創建したと伝わっています。

また、ここの西蓮寺は曼珠院の院号を持っており、鎌倉時代の中頃、比叡山の無動寺から慶弁阿闍梨（けいべんあじゃり）が来て七堂伽藍を造営し、京都の曼殊院（まんじゅいん）の門跡忠尋大僧正が、乱をのがれてこの寺に来てとどまり、曼殊院の額を山門にかかげたと伝えられています。

私も中学時代の京都修学旅行の自由時間にこの曼殊院を訪れたことがあります。修学院離宮の近くにひっそりと有りましたが、庭園も素晴らしく、戸や襖の取手の模様まで大変凝った造りで印象深

く思いだされます。
このように歴史ある寺であり、常陸国の天台宗では中心となる寺名のですが、この有名な常行三昧会（仏立て）の行事の始まりとして少し変わった内容が伝わっています。
それは、源氏の元となる八幡太郎義家が後三年の役（1083～1087）の蝦夷征伐時に鹿島神宮に戦勝を祈願するためにこの地を訪れました。
そしてこの土地の長者（唐ケ崎長者）の家で食事をふるまってほしいと頼んだそうです。
しかし、口に合うようなものが用意できないと丁重にお断りした所、粗末なものでもよいのでといわれ、出されたのがたいそう豪華な食事だったそうです。　こんな金持ちの長者を生かしておいたら大変だと義家はこの長者一家を皆殺しにしてしまった。ところが娘が一人だけ生き残り、この西蓮寺に預けられ、この娘が両親の供養のために、比叡山から常行三昧会をこの寺に移して始まったというのです。でもこの話は長者の没落伝説そのものであり、水戸の渡里町に残された渡里長者伝説とそっくりです。
　この寺は薬師如来が本尊だが、常行堂に祀られているのは「阿弥陀如来」であり、天台宗の寺であるのにこの仏立て行事は宗派を問わないのは何故なのか？まあ、あまり考えても真実は出てこないと思うが、少しおかしいと思うのは私だけなのか？　びんづる尊者像も「この長者の娘で、びんづるおばあちゃん」と言うのもなんだかおかしい気がしますね。　一方、この西蓮寺の本尊は薬師如来で、常行堂の西側にある薬師堂の後ろにあるコンクリートの収納庫に保存されています。
この薬師如来座像は、開基した最仙上人自らが彫ったものとされ、一木背刳（せぐり）造りです。
この日は行列を見ようと地元の保育園（幼稚園）生か小学生？　見物に来ていました。みんなお行儀よく座って行列の来るのを待っていました。
１０００年以上にもなると言うイチョウの木は本当に見事です。子供達も不思議そうに見上げていました。

御立山は荒れて

伊東弓子

暑さ寒さも彼岸まで･･･と心浮かれる気持ちで過ごした。花の便りは日本中の名所という名所を駆け巡った。それもいいだろうが、地域にも植えた人達の思いを込めた並木や木がある。
　次々に彩られる野山をみていて感じ、ふうっと思った。大きな力が（それは風かな）大地や山々に息吹きかけていくように思えた。ＮＨＫの朝ドラマ「らんまん」をみて、あらためて草、花、木々への思いが一層強くなった。その上、小学校時代の植物採集を思い出した。夢中で夏休み中暑さも忘れていた妹・弟との時間。
　仕事を始めた頃、先輩の先生が草花との遊び、名前を教えてくれた。師範学校時代の先生の中にとみたろう博士の直弟子だった恩師がいらっしゃったそうだ。
　友から声がかかり、花を見に行った。語る人の視線で説明が加わり、私らも聞きかじったりしたことを口だししたり、有意義な一日だった。孫も大きくなって入学式の話題もなく、浮き浮きした気持ちも遠のいてしまった。

清明　四月五日（旧閏二月十五日）
「清浄明潔の略で、春浅い時期の清らかで生き生きとした様子を表している。
５～９日　玄鳥至（つばめきたる）＝玄鳥とは燕（つばめ）の異称とか。燕が南から飛んできて、本格的な農作業の季節となるとか。
10～14日　鴻雁北（こうがんかえる）燕と入れ替わるように、前の年に飛来した雁が北へ渡っていく時期
15～19日　虹始見（にじはじめてあらわる）＝朝は西方、夕方は東方、雨上がりには空に鮮やかな虹が見え始める頃
　八坂神社の森の一帯がなくなるようだ。崖崩れを防ぐために木々を切り、近代工事が始まるという立て札が建った。白井先生がよく話しておられた。霞ケ浦の森一帯が豊かな縄文の森だ。人々が住み、豊かな文化や生活があったと自慢しておられたが、もう来年の春からは見られなくなるだろう。森は何百年も経たなければ元には戻らないだろうが、やがて最後の緑の息吹に彩られるだろう。対岸の関川・八木は地形が少し違うようだ。
穀雨（こくう）　四月二十日（旧　三月朔日）
百穀春雨に潤う。春も終わりに近くなります。この頃には煙るような春雨の降る日が多くなる。この雨が田畑を潤し、穀物などの生育を助けてくれる。
20～24日　葭始生（あしはじめてしょうず）＝水辺に葦が芽を吹き始める頃
25～29日　霜止出苗（しもやみてなえいずる）＝霜が降りる時期もようやく終わ

り、苗代では水稲の苗が大きくなりだす。

30～5月5日　牡丹華（ぼたんはなさく）

＝牡丹の花が咲く時期、大きな花を咲かせ、その華やかさは格別。中国ではとても喜ばれる花ですが、中国の七十二候には牡丹がない。

夜明けの早まりで、犬の散歩もいそがしい。蛙の鳴き声が聞こえる。心地よく聞きながら野苺の実を摘んで食べる楽しい朝。一時間位一回りしてくるといつの間にか、もう蛙の声は聞こえなくなっていた。月末にもなってくると〝連休！連休！〟と大騒ぎ煩さい程の宣伝、遊びへの誘惑、ご馳走の紹介、何故こんなにと思うほど。行かれない者の僻みか！　農家は田植えの準備を始める。田おこし、畔の草刈りと忙しい。畑つくりをしている友が草取りが忙しくなってきたと愚痴をこぼしていた。

若葉の息吹きかけている風が吹き始めたのだろう。新芽・若葉・新緑・森に林にさまざまな緑の美しさが目を癒してくれる。

四月廿九日は昭和の日とか、昭和天皇の誕生日の祝日だったが、昭和も遠くなりにけりという気持も正直！

五月二日は八十八夜、子供の頃大人達が〝「八十八夜のわかれ霜」今夜あたりからここ二～三日気をつけろよ〟と言っているのを思い出す。そして霜が降りないように火を燃やしていた。子供達がいた頃は、柏餅づくりした。賑やかで楽しかった。菖蒲湯も体がよく温まった思いがするが、今は一人で入って出てしまう。続いてということもない淋しさ。ファミリーマートに三色団子が並んでいた。桃色、白、緑。この団子の色、何か意味あるのと聞いてみた。桃色は蕾、白は桜の花、緑は桜の葉を表しているとのこと。又桃色は春、白は冬、緑は夏を表しています。秋はないんです。団子は飽きないという訳のようですとのこと、よく伝えてくれた。

五月十四日は母の日とか、姑と母のことを思い出した。姑は何の祝いもしなくていいという人だった。それでも下手な私なりの料理を作ったりした。母には折紙を張り合わせてカーネーションにそえて歌ったりした。

母こそは　命のいずみ　人の世に
あらん限り　ほほえめり　あまつ光

おおいなるかな　母の姿

随分忘れたところもあるが、お茶を飲んだり電話があった。翌日は息子から嬉しい言葉があった。「昨日は母の日だったんだな。飯でも喰いに行けばよかったかな」と息子の声。

立夏（りっか）夏の気始めて立つ。立夏、夏立つは夏の代表的な季語です。暦や歳時記では春の始まりですが、実際にはまだ春の色合いが濃い時期で、梨や桃の摘果やミカンの摘花の頃です。

6～10日　蛙始鳴（かわずはじめてなく）

＝冬眠から目覚めたカエルが田んぼや池で泣き始める頃、活発に活動を始めると本格的な夏が訪れる

11～15日　蚯蚓出（みみずいずる）＝土が温かくなり畑では蚯蚓（ミミズ）が地上にはい出てきて盛んに活動を始める時期

16～20日　竹笋生（たけのこしょうず）

＝竹やぶでは笋（たけのこ）が生えてくる時期

春から四ツ葉のクローバを一つしか見つけていない。やっと二つ目見つけたのはポケットの中で潰れていた。いそいでグラスの器に入れて毎日見ていたが、もとには戻らなかった。

卯月（うつぎ）陰暦四月の異名。卯の花月の意。十二支四番目の卯によるともいう。

五月廿七日（旧四月八日）大井戸鬼子母神の縁日。都合つかずに行けないので、前日近くの若い人に頼んでくる。だんだん地域の人達若世代に行って貰うようにしたいのも願いの一つ。

日は大場家を尋ねた。〝水戸の姫君にお会いしよう〟という声かけをした。和子さんも梅沢さんも田口さんの姿も見えず淋しい思いだった。

小満　五月廿一日（旧　四月二日）

陽気盛ん。万物ほぼ満足す。麦は実を付け熟し始める。などと表現される。野山の植物が実を結び、麦の後、田植え準備もはじまる時期とある。

21～25日　蚕起食桑（かいこおきてくわをはむ）＝眠りからさめた蚕が盛んに桑の葉を食べ始める。春蚕（はるこ）の成長が目覚ましい頃です。

26～31日　紅花栄（べにばなさかう）＝紅色の染料や食用油として栽培されている紅花が畑一面に咲き誇る時期です。

6月1日～5日　麦秋至（むぎのときいたる）＝麦が熟して畑一面が黄金色になり、収穫の時を迎えます。麦秋は「旧暦4月のことを指します。

筑波の峰の間に沈む夕日は都合悪く見ずに終わった。私の生活範囲で見る田は大半田植えが済んだ。日に日に畔の緑も色濃くなり、苗の株が増え

ている。
友の家の竹の子退治に出かけた。まだ出始めたばかりで、あちこちに首を出している。物凄い勢いで伸びていくだろう。友一人ではどうしようもない程の状況になるだろう。六人で大量に伐採し、手頃の物は頂く分として分け、どうしようもない物は切り倒していった。ここに来て初めてわかったが、台地は富士峰館という山城があった所。戦国時代の出城だから当然かもしれない竹藪の途中から断崖絶壁になっていた。元々このような地形だったのか、それとも館をつくるときのため削ったのか、石岡、紅葉線を造る時に土をとったのか、堤防のために土を使ったのか見当がつかないが、これから調べてみよう。今は高崎地区の山となっているが竹を始末する時間もないのだろうか。道路側からみると、竹藪におおわれた山に見えるが、ここから見る姿は恐ろしい姿に見える。江戸時代は水戸藩の御立山で、木を育て、切り、随分と役に立ったことだろうに。山には山の歴史があることを知らされた。

芒種　（旧　四月十八日）麦を収め稲を植う。
稲や麦など、先に細い毛がある「芒（のぎ）」のある穀物を指しています。梅雨入り前後の時期で種まきや田植えの頃です。

入梅　六月十一日（旧　四月廿三日）
棚田も田植えは済んで苗も分けつしてたくましい姿で揺れていた。ホ・ト・メの里にも目高が泳ぎ、紫陽花が緑の木々の中にどっしり咲いていた。

6～10日　蟷螂生（かまきりしょうず）＝小川のほとりを飛び交う蛍や蟷螂が生まれる時期です。

11～15日　腐草為蛍（くされたるくさはほたるとなる）＝腐った草が蛍になるという言い伝えがありました。腐った草の下で蛹（さなぎ）から孵化（ふか）した蛍が、光を発し始める時期です。

16～20日　梅子黄（うめのみきばむ）＝梅の実がだんだんと黄ばみ始め熟していく時期です。

寒いと感じたり、喉が痛むなどしたが、うがいをする程度でいた。その揚句コロナにかかった。文化協会祭の展示も参加出来なかった。日常生活についても周りから大分批判を受けた。周りの人に迷惑や心配をかけたことはすまないと思ったが、私がそんな悪いことをしたのかと一人自分を労わっていた。

“トーキョーウ、トッキョキョク”の声をある日耳にしたが、その後、なかなか聞くことが出来なかった。高崎の“菜の花も会”で御留川の話をすることになった。前々から心配だったが、自分なりに話すことでゆるしてもらおう。菜の花の会長さんがちゃんと締めくくりをしてくださった。

さつき（早苗月の略）仲夏、五月十八日（旧五月朔日）
父の日という。コマーシャルや宣伝に左右される訳ではないが、息子達はどうしたかな。娘たちは・・・など、それぞれの家庭内がうまく回っていて楽しければと願っている。「一年経ったね」という風の声に、あっと過ぎていった一年を思い、医者通いはしていてもあえて冗談を言えることを有難く思う。

夏至　六月廿一日　（旧五月四日）
夏のちょうど真中。北半球では昼が最も長くなる日。梅雨真っ盛りでもあります。

21日～26日　乃東枯（なつくさかるる）＝乃東（だいとう）とは夏枯草（かこうそう）の古い言い方で、ウツボクサのこと。冬至の頃に芽を出すこの草も、夏至の頃には枯れてしまう。

27日～7.月1日　菖蒲華（あやめはなさく）＝古くはアヤメと呼ばれた菖蒲の花が咲き始める時期を指す。

7.月2日～6日　半夏生（はんげしょうず）＝半夏とは漢方薬に使われる烏柄杓（からすびしゃく）というサトイモ科の草です。この草が生え始める頃です。

朝の散歩、六時出発としたが歩いていると汗ばんでくる。“いづみ”は苦しそうに「ハアーハアー」肩で息するとはこのことかと改めて思う。蓮田や流れに座り込んで体を冷やしている。下半身泥まみれになって帰ってきてからの半日なめなめきれいにしている。

地区の作業が毎月入っている。年のせいか一日に二回は無理になってきた。一つは断るようになった。三か月に一回の原稿書きも余裕のない状況にあきれる。言い訳するのはやめよう。

閏月が入ったせいか現実と暦の差を強く感じて時間がかかったことも事実。

野口雨情生家 資料館

小林幸枝

野口雨情は、２０２３年、生誕１４１周年を迎えました。北茨城の方へ旅行した時に、野口雨情の生家があり、ビックリしました。雨情はこちらの出身だったのですね。その時に、この野口雨情生家 資料館に寄りました。資料によると、

「野口雨情は明治15年（１８８２年）磯原町の野口量平の長男として生まれ、本名を英吉といった。磯原尋常小学校（現在の精華小学校）を卒業すると、政治家の叔父野口勝一氏のもとから東京専門学校（現在の早稲田大学）に学んだ。明治37年頃、作詩生活に入り、最初の詩集「枯草」を出版した。大正10年頃になると、北原白秋、西条八十と並んで三大童謡詩人と歌われ、昭和20年、64歳でなくなるまで、全国各地を旅し、多くの民謡集や童謡集をつくり、現在でもたくさんの人々に親しまれている。野口雨情の生家は廻船問屋で、明治15年当時、観栄丸と観音丸の運搬船を所有していた。昭和42年３月30日、茨城県の文化財に指定された。」と書かれていました。

資料館（生家）は木造二階建ての立派な屋敷でした。ここには水戸藩第２代藩主徳川光圀が逗留し、「観海亭」と名付けるなど水戸徳川家とのゆかりも深く、古文書なども保管されていました。

雨情の生家 資料館の入場時に、野口雨情のお孫さん・野口不二子さんがおいでになり、大変歓迎して頂きました。私は耳が聞こえないので、歴史資料などの説明には、筆談したり、ＵＤトーク（読音アプリ）使用したり、と色々して頂き、とても楽しめました。

お孫さんの野口不二子さんは、お洒落でとても上品な優しい方でした。写真を一緒に撮っていただきました。

資料館にて

風と共に　《理》（32）

大輪啓展

季節毎にテーマを変えて、

今回のテーマは、「未来」

日々暑さが増しています、今年はスーパーエルニーニョとなる可能性も等と言われておりますから、先日の台風２号の大雨もそうですが、異常気象とならない様祈るばかりです。

物価高や光熱費の高騰と家計は安定しませんが、体調管理はしっかりと元気に過ごせる夏にしたいですね。

今回は、未来という壮大なテーマについて、いつもながら持論を展開していきます。

人の人生において、振り返ってみると様々な場面で分岐点があったはずです。

無数の枝分かれした分岐点を絡み合う様に選択して今があるわけです、当然この先も事あるごとに判断して無限とも言える様な、無数の未来を一つずつ選び描いて行くわけです。

今までの人生後悔はありますか？

戻りたい分岐点はありますか？？

これから先の道のりを、自信を持って進む事はできますか？？？

何かしら思う所はあるのでは無いでしょうか。

ただ一つ言える事は、何かを得たいなら、成し得たいなら、その対価としての努力は必ず等価交換・それ以上が必要となることでしょう。

今自分が置かれている状況は、様々ではありますが、自分で選んで来た今です。

誰にも文句は言えないし、この上無い幸せを味わっていれば、それは自分に与えられた正当な現状です。誰かと比べるべくもありませんが、満足の行く今ならなおさらの事、自分にご褒美をと言いたいところです。

満足の行く現状でない、今後は満足の行く未来を描いて行きたい、満足できなかったとしても、今日より明日、明日より明後日は、少しでも進歩のある明日を目指したい、もしもその様に考えるのであれば、努力は惜しまず事にあたるべきです。

楽して良い結末を得る事は出来ません、例え一瞬・或いはある程度の時間を、何かで誤魔化したとしても、現実が変わる事はありません。

夢を見る事はとても大事です。こんな風に成りたい、こうなれば満足、いつかこうしてやる。結果は、過程なしには成し得ませんから、必ず前段階において苦労はついてきます。その苦労を、どう捉えるかも一つの要素ですし、どう乗り越えるかもその後の人生には大きな意味を持たせるはずです。

未来とは、自分が生きてきた道程の延長線上にあります、一発逆転、なんて宝くじに当選する様な確率で、大金を手にする事もあるでしょう、ですが、自分のこれまでに多からず関わって来ますので、大金を手に入れたとて、幸福になると＝ではありません。

日々のちょっとした良い事の繰り返し、それがやがて大きな反動で自分に返ってくる、そんな気がしてなりません。

人の痛みの分かる人には、共通して優しさが伴っています。

海外番組で目にしましたが、ある小さなドッキリが譚を発しまして、やがて大きなうねりの様な幸運が返ってくるというもの、

ある会社の役員が、ホームレスのフリをして路上にいます。

「ずっと食べていません、何か食べ物を分けてください。」

と言ったスケッチブックの１ページを抱えて、道行く人々に声を掛けます、大半の人は目もくれません、仕方なくその人物は歩きながら、同じような身なりをして座っている人にも声を掛けます、すると、普通の格好をして食べる事にも困らない余裕のありそうな人々は、全く手を差し伸べないにも関わらず、その座り込んでいる人は迷わず、自分の残り少ない食べ物や僅かばかりのお金を何の躊躇もなく、差し出したのです。

これに感動した、仕掛け役の人は、自分の経営する会社に雇うと同時に住まいや軌道に乗るまでの資金を、面倒見るに至るといったものでした。

後日、あの時になぜ残り少ない食べ物や現金をくれたのか尋ねると、その方はこの様に答えました。

「自分よりも必要そうに見えたから、食べられる物が無くて辛い経験を自分もした事があるから、今は多少なりとも食べて行けているから。」

貧しいながらも心は裕福なのです。

人の痛みが分かるから、勿論辛い経験はせずに生きていけるのが、ある意味では幸せと言えるのでしょうけれども、この様に人の立場になって、同じ目線でもの事を考えられる様になると、苦しい毎日にも簡単には得る事の出来ない貴重な考えを養う事が出来たわけです。

この方の様に、行いが形に成り生活が激変する事など、そうそうあるものではありませんが、心の裕福な人にしか訪れない奇跡だったのは言うまでもありません。

人生１００年、どの様な道程を経てどの様な未来を創造するかは、その人次第ではありますが、例え今どんな過去を背負っていたとしても、これから先の道を明るく照らして行きたいなら、少しでも裕福な心を育んで、一歩また一歩と足を進めることをオススメします。

自分の人生の責任は、自分にしかないのですから。

それではまた次回。

思考探求”河童伝承を思う”＝西方保男

常陸の国石岡に移住して一年半ほどの時を経た。

そして、日々、この地に埋もれた歴史の深さと重みにあれこれ、思考を巡らせる日々を重ねていた。

日頃から、歴史の思考実験に想いを馳せていると、必ずやそうした人とのご縁に巡り会う恩恵にあずかるものだ。

そんな折、私が歴史に興味があるとのことから、当地に来てから親身に及ばぬご尽力をいただいている石岡在住の方から、すぐさま、まことに興味深い貴重な場所をご案内頂くことになった。

所は、小美玉市の川戸にあるご親族のお宅であった。駐車場に着くや、すぐ、目に飛び込んできたのはその家の庭の一角にある、立派な“川戸のカッパ家伝薬由来の石碑”そして“川戸カッパ様音頭の歌碑”、さらに碑の前には何匹もの？カ

ッパの置物だった。

それでは、何はともあれ、ご当主にお開きしたカッパ伝来の謂れを、当家の歴史の由来の碑から触れてみたい。

川戸のカッパ家伝薬由来の碑より

当植田家は、五拾六代清和天皇第６王子貞純親王嫡男鎮守府将軍経基公三男従四位武蔵守源満季八世の末葉である。

約五００年前、応仁の乱の頃、小川町川戸にある植田家の井戸周りにザンギリにした生き者が毎日現れた。体の大きさは十二、三才だが人間にしては様子がおかしい。無気味に思った植田家の当主がある日「お前は何者だ」と問いただした。貧相な背の低い生き者はなかなか答えなかったが、やがて口を開き「決して悪い事をする者ではありません。私は此の付近に住むカッパです」と答えた。

当主は「此の辺をうろついては困る。今後再びお前の姿を見るような事があったら刀で切り捨てるぞ」と鯉口を切っておどした。カッパは「どうか命だけはお助けください。その代わり、とげ抜き・血の道・やけどに効く薬の作り方をお教えします。ただし此の薬を必要とする人には代償なしであげて下さい」といって薬の作り方を教え、その日以来姿を消した。

現在、植田家に伝わるとげ抜きの家伝薬は、このカッパから伝えられたものと言われ、とげに悩んでいる人に無償で分け与えている。

植田家では、代々の後継者に家伝薬を伝承させ、毎年十一月十五日には、屋敷内に薬王殿を作りカツパの霊を丁重に祀っている。人々は、植田家の前を流れる小川の橋をカツパ橋と呼び、植田家の屋号を「川戸のカツパ」と呼んでいる。

（「常陸の伝説」）藤田稔編著より」）

「茨城ふるさとのむかし話」にも「川戸のカッパ」の話が記されています。

編著者　茨城民俗学会代表理事　藤田稔先生

以上　川戸のカッパ家伝薬由来の碑より

この植田家に伝わる「カッパ伝承」は今日に至るまで代々連綿と語り継がれてきているという、まことに驚きを隠せない。カッパ伝承は民俗学者柳田国男や折口信夫を引くまでもないが、日本各地に存在する。当茨城の地においても牛久のカッパの存在は言うに及ばず、つとに知られている。

河童とはいったい何者なのだろうか？

「神話伝説事典」によれば、かっぱ　河童　は水界の妖怪。頭は髪をゆりかぶり、いわゆるオカッパ頭をしており、頭の上に皿があって水をたたえる。その水が河童のカの源泉で、水がなくなった途端に力がなくなる。肌はぬるぬるしていて青黒いとも赤いとも言い、腕は左右がつながっているので、一方を強く引くと両手が抜けてしまう。姿は一般に童形と考えられているが、また鳥のように、嘴(くちばし)や羽根をもち、或は亀や獺(かわうそ)の姿を想像しているところもある。相撲を好む性質があり、人や馬を引っぱりこんで紅門から手をいれて肝をとる。川や池や沼に住むが、とくに山奥の深淵や川が生みに流れ出る河口目のあたりで活発に活動する。馬のひずめのあとの水たまりにでも千疋すめるともいう。むかし飛騨工匠(ひだのたくみ)が大きな建築をしたとき、人でが足りないので藁人形(わらにんぎょう)を作って手伝わせ、工事が終わって川に捨て、そこらのものを食えと言ったので人を捕って食うようになった。

左右の手がつながっているのも、藁人形を作るときにめんどうがってそうしたためだという。河童の害を防ぐためには、仏様に上げた飯を一口でも食って行けばよいとか、鍋墨を額につけておくとよい。河童が逆に人に捕らえられた話もはなはだ多い。馬を引き込もうとして陸に引きあげられ、

助けられた礼に魚をとどけたとか、水をかけたら皿に水が入って力が出て逃げたとか、いたずらして腕を切られ、その片腕をとりかえしにきたところから金創薬を持っていることが知れ、助けられたかわりに秘伝を伝授したりする。河童の詫証文(わびしょうもん)を保管する家も各地にある。河童が金物を嫌うのは、水霊の特性であり、胡瓜(きゅうり)を好むのは水神である祇園信仰と結びついた結果であろうし、出没活動の場所も水神祭の祭場と認められるあたりが多い。椀貸伝説と結びついた例も多いし、春秋に去来する伝承は田の神と山の神の交替を示している。

〔参考〕神話伝説柳田國男『山東民譚集』・折口信夫『河童の話』

次に「常陸国風土記」から探ってみよう

「わが国に現存する最も古い文献は、「古事記」と「日本書紀」である。この他に、各地の風土記があり、その一つに「常陸国風土記」がある。和銅六年(七一三年)に中央政権より国司に命じられつくられたものである。『常陸国風土記』の編述者は万葉歌人高橋虫麻呂説や藤原朝臣宇合(ふじわらあそんうまかい)という説がいわれる。

風土記の茨城の郡とは、『和名抄』郡名部に「いばらぎ牟波良岐　国府」とあって、国庁の置かれていたことが知られ、同書によれば当郡に十八の郷の在ったことが知られる。なお常陸国庁及び郡街(ぐんがい)は石岡市茨城にあったという。茨城の郡。東は香島の郡。南は佐我(さが)の流海(うみ)。西は筑波山。北は那珂(なか)の郡である。

古老は次のように伝えている―昔、「国巣」土地の人々はこれを「つちくも」、あるいは「やつかはぎ」といっている。(名を)山の佐伯(さえき)、野の佐伯というものが住んでいた。あちこちいたるところ(の山腹に)穴倉を掘っておいて、いつも穴に住んでいた。だれか知らない人が来た時には、すぐさま(近くの)穴倉に入って身を隠し、その人が行ってしまうと、また野原に出てきて遊ぶのである。(国巣(くず)たちは)狼(おおかみ)のような性質、梟(ふくろう)のような情(こころ)を持っていて、鼠(ねずみ)のようにあいての隙をみてはこっそりその品をかすめ盗み、だれからも招かれたり手なずけられることもなく、ますます、土地の人々の風習から隔たっていたのである。この時大臣(おおみ)の同族である黒坂命(くろさかのみこと)は(国巣たちが)穴の外に出て遊んでいる時をねらって、茨棘(うばら)を彼らの穴の中に仕掛けておいて、それから馬に乗った兵を放って、突然(彼ら)を追いたてた。国巣たちは、いつもの通り穴倉に走って帰り、(その中に入ったところ)、ことごとく茨棘(うばら)にひっかかって、その棘(とげ)に突きささって傷つき痛んでちりぢりに死んでしまった(略)

この国巣とは国主・国樔人・国栖などとも表記される。土着の先住民をいう語で都知久母(つちくも)　蜘蛛・土雲とも表記される。未開の先住民を、中央勢力の側が異類視して呼んだものか。

次に夜都賀波岐(やつかはぎ　)八束脛・八掬脛とも表記される。先住土着民の身体的特徴を誇張して表現したもので、前項同様異類視しての命名と思われる。『記』『紀』にみえる「長脛彦(ながすねびこ)」や「七拳脛(ななつかはぎ)」も同類の称呼か。

このような表現から思うに、とにかく、どうしても畿内大和の中央政権側の地方先住民に対する、異端視または蔑視憾を拭い去ることができない。蔑みは、政権に対して、まつろわぬ民に対する粛清や制圧として悠久の歴史から連綿と続いてきたのである。

鹿島舜は「王朝興亡史」帰化人の過去抹殺で、松本清張が帰化人系の名が、動物、魚、鳥の名によって表されたとして、次のように述べている。『日本書紀』『続日本紀』『日本後紀』『続日本後紀』『三代実録』『日本逸史』『常陸風土記』などから。

なお、ウマ、ウシ、トリ、ヒツジ、サル、イ(猪)ウ、イヌなど十二支関係の名は除いた。

▽烏＝[神功]　羽白熊鷲　[後]　日下部忌寸阿良多加(荒鷲)　[雄略]　膳臣鳩(イカルカ)　[舒明]吉士赤鳩　[舒明]三輪君小鵜鷀(コササギ)　[皇極]　国勝吉士水鶏(クイナ)　[雄略]平群朝臣真鳥

▽獣＝　[孝徳]蘇我田口臣川堀(蝙蝠)　[敏達]大鹿首小熊　[孝徳]中臣連、押熊　[天武]坂上直毛　[続後]佐伯宿禰伊多智(イタチ)　[舒明]高向臣宇摩　[天武]石川朝臣虫名(ムジナ)　[光仁]刑部直虫名　[続]忌部宿禰虫名麻衣夫(ヒラフ)　[続]忌部朝臣比良夫

▽貝＝[続]石川朝臣枚夫(ヒラフ)　[続]忌部朝臣比良夫

▽魚＝[舒明]大伴連鯨　[天智]河内直鯨　[天武]廬井連鯨　[三]漢人貞魚　[天武]蘇我赤兄(アカエイ)　[雄略]吉備海部直赤尾(緋魚)　[孝徳]塩屋鯛　[天武]堺部宿禰鮒魚(コノシロ)　[欽明]大連物部尾輿(オコゼ)　[続]紀朝臣鯖麻呂　[続]六人部連鯖麻呂　[桓武]県犬養宿禰堅魚(カツオ)　[後]林宿禰沙婆(サバ)　[天武]民直小鮪(コシビ)　[天智]吉士小鮪　[続]錦部連針魚女　[続]

凡直黒鯛[嘉]秦忌寸鯛女[続]大豆鯛麻呂[続]大神波多石持[続]船連大魚[続]尾張須受枳(スズキ)[逸]都宿禰腹赤(ハラカ)[逸]桑原公腹赤[逸]吉備部真須(マス)[三]粟宿禰鱒麻呂[三]粟凡直鱈麻呂[後]粟田朝臣入鹿[皇極]蘇我臣入鹿[続]鴨麻臣小鮒[応神]吉備品遅部鯽(オブナ)[鋒明]難波玉造、鮪魚女

▽虫＝[天武]人造糠虫[続]阿部朝臣糠虫[続]井上忌寸蜂麻呂[続]村国連虫麻呂[孝徳]粟田臣飯虫[続]布勢真虫[続]村国連小虫[続]物部毛虫(ケムシ)咩[斉明]阿曇連頬垂(ほたる)

*ここには河童なる存在は見えない。つまり河童は、抽象的な架空の概念故に実在の動物としての認識はなかったのだということなのだろうか？

ところで、鹿島舜は『日本書紀』にみえる動物名をもつ氏族と人物は

一、ほぼ「継体紀」以降に集中する、

二、動物名所有氏族・人物は多く朝鮮との外交、征討軍関係者、国内征討軍の関係記事に登場し、また渡来人系氏族に多い

三、いわゆる大伴(おおとも)、平群(へぐり)、葛城(かつらぎ)、三輪(みわ)などの伝統的氏族にその例をみない

さらに、桓武以降に新姓を得た高句麗と百済系の人々は帰化人である。同じく帰化人の中で、動物名によって表現された敗者グループと反対に帰化したことを隠し、古来の日本人であるかの如く名付けられた勝者グループとが存在したのである。さきに道鏡の神託事件の時、和気清麻呂（わけのきよまろ）が別部穢麻呂(わけのけがれまろ)とされたのも処罰の一種であったから、動物によって表現された人々はすべて改名によって処罰されたことになると言う、実に興味深い。

参考文献「日本王朝興亡史」鹿島舜・「常陸国風土記」秋本吉徳

尚、紙数の関係から、河童伝承を思うは次回再掲させて戴きたく、お許し願います。

旅の思い出（1）

ヤマナカタダオ

五年ぶりに老人会の一泊旅行に参加しました。

今年の五月に入ると、感染者が、少なくなりましたので、六月の上旬に、福島県の芦ノ牧温泉に行きました。参加した方は、本来は、18名でしたが、高齢なので、直前に、体の具合が悪くなり、参加者は、14名となりました。男性が11名で、女性が3名でした。

当日は、快晴になり、朝の8時に、ホテルが差し向けたマイクロバスが、八坂神社の近くのA宅に着きました。皆んなで、飲料やお菓子などを積み込み、出発しました。高速道路の千代田インターに入り、進路を北に向かいました。最初の休憩は、友部サービスエリアに、立ち寄りました。店はリニューアルして、オシャレな雰囲気でした。バスに戻りましたら、幹事さんがビールや、ウィスキーや、日本酒を渡してくれました。

私は、トイレの事を考えて、日本酒にしました。ワンカップも、今は、２００ml が主流です。おつまみを片手に、気分爽快になりました。移り行く景色も、新緑で、田植も終わり、目に青葉という感じでした。

ところで、今回の私達の旅行者は、最高齢の方は、男性で91歳です。毎日元気で散歩をしています。車も運転しています。今回の老人会は、平均年齢は80歳代です。

途中二度ほど休憩して、昼食に、会津若松市の飯盛山の近くの食堂に入り、昼食をとりました。食事をしながら、店の女性従業員が、白虎隊の踊りを見せてくれました。食後は自由行動になり、私は、仲間数人と飯森山を見学して、バスに戻りました。

バスに乗り、3時ごろに芦ノ牧のホテルに到着しました。部屋は5階でした。私の部屋は、3人部屋でした。お互いに顔見知りの人でしたが、久しぶりに、顔を合わせ、昔話に、花が咲きました。大浴場の湯につかり、今日一日の疲れを取りました。

6時から宴会になり、料理を食べながら、お酒を酌み交わし、カラオケで唄ったり、楽しい2時間半が、あっという間に過ぎました。他の部屋の方は、自分の部屋で二次会をしましたが、私達3人は、テレビを見たり、話をしたりして、10時には、就寝しました。

翌朝は、朝5時半から、お風呂に入れるので、3人で大浴場に行きました。風呂場には、70代の男性がいましたので、「どちらから、お見えになりましたか？」と聞きました。「土浦の荒川沖です」との事でした。ご夫婦でのんびりと二人旅をしているそうです。息子さんが商売を引き継いでいるとの事でした。

風呂の後に、朝食まで一時間ほど間があるので、ロビーで、コーヒーを飲みました。高齢の男性が一人、コーヒーを飲んでいたので、話しかけましたら、秋田県出身の方で、野田市ざいじゅうですが、法事で故郷の秋田県に行った帰りで、今回は、

電車で来たようです。
聞くところによると、奥さんは、数年前に認知症になり、現在は、老人施設に入居しているそうです。88歳のこの方は、今でも車を運転していて、一人で生活しているとの事でした。
朝食を済ませて、9時にホテルを出発して、二日目の最初の見学は、下郷町の大内宿に、立ち寄りました。9時半ごろに到着したので、両側に50軒ほどのお店は、営業を始めたばかりでした。ほとんどの家は、茅葺き屋根でしたので、江戸時代に、タイムスリップした気分になりました。
この宿場通りは、江戸時代は、日光と会津を結ぶ街道で、大名や旅人の宿駅として、重要な役割を果たしていて、コロナ禍の前の観光客は、年間80万人もの人が、訪れ賑わいを見せていました。大内宿を10時半ごろに離れて、一路、那須方面に向かいました。
周りの景色は、茨城県北の、大子町のように、１０００ｍクラスの山々が聳えていて、福島に来たなーと感じました。昼には、那須のお菓子の城に到着して、昼食をとり、お土産をいっぱい買いました。
北関東自動車道を笠間方面に向け、走行していると、突然、筑波山が見えてきました。
馬耳山を見て、ほっとしました。

【風の談話室】　《読者投稿》

やさと暮らし（73）　　さと女

季刊第二号です・・・春から夏ですが、季節が早くなっているようです。冬の終わり頃には、何日も初夏の様な日が・・・?そして、春には夏日が続きました・・夏の訪れが怖くなります??そして7月になると、連日の真夏日から猛暑日迄。これ以上熱くなったらどうしよう・・・?梅雨明けはまだです。

【４月】

・湯袋峠の途中に、八郷ライオンズクラブが管理している万葉の森がある。此処数年桜の木を20本植えたと言うので、見に行ってきた。その内3本が、いくら探しても見当たらない・・・そして3本が、少ない乍らも花を咲かせて居り、他は葉を実らせ根付いていた。万葉の森全体には沢山の山桜が満開で、花吹雪が美しく散っていた。万葉の森は左側に降りるのだが、反対側が何やら工事中だったので覗いて見ると、モンゴルのゲルのようなものが、何棟も建っている。丁度バーベキュー等機材が搬入中・・・また、一つ八郷の名所になるのでしょうか。

・辻のいちご団地では、恒例のイチゴ祭りで朝日里山学校は賑わっていた。その近くの友人から花見の誘いを受け、竹仲間を誘って花見に行った。桜前線は過ぎ去り、その後凛として咲く、緑色がかかった桜、御衣黄桜とウコン桜が3本見頃だった。途中柿岡の友人宅にも寄って、見頃の御衣黄桜を仰ぎ見、上品な桜を堪能した。

・ハナミズキ満開です。かれこれ10年位前だったか、楽市さんが大型トラックでハナミズキの苗木をたくさん持って来てくれた。ギター館の庭に10数本植えて、我が家には5本植えた。毎年綺麗に咲いてくれ、今年は何時もより3週間も早い・・。

・相変わらずの魚捕り・・・その魚をネダッテ近所の猫が群がる?お爺さん(我が旦那)が歩けば、猫もゾロゾロ・・・奇妙に絵になる景色???

・3日連続でライブ楽しんだ。土曜日はコンコンギャラリーでの野口夫妻によるオカリナコンサート。日曜日は地元のオカリナサークルの方達による演奏。そして今日は地元の方のクラシックギターの演奏。こちらはギターのコンクールで見事金賞をとった記念のお披露目、贅沢な時間を過ごした。

・人生の大先輩が3年ぶりに我が家へ・・・。フラワーパークで購入したバラの紅茶を飲んだり、お抹茶点てたりとマッタリとした時間がながれた。そして、大先輩の息子さんが作ったゲーム機で2時間も遊んでしまった。パチンコのようなもので、玉を打つと杭に当たり数字の所に入り、競い合うのです。玉と杭がぶつかる音が心地よく、楽器のよう。90代、70代、60代3人が、キャッキャッと大騒ぎ・・・。

【５月】

・連休初日・・・彼方此方で田植えが始まった。水の張られた田んぼには周りの景色が写り、今の時期ならではの美しさです。そして今夜からカエルの大合唱が始まるのだろう。日頃からの趣味・・・クラフト作りに精を出し、獅子頭の魔除けみたいなものを作った。

・昨年秋にギター館時代からの知り合いから電話で、終活をするのでバラの株をもらってくれないかとの連絡が入り頂いていたバラの株の数々。とりあえず家の周りに地植えしておいたら、ボチボチ咲きはじめた。手放した方も花に会いたいのではと思い写真を送った。電話の声は元気そうで、体調をみて訪ねたいと言っていたが、是非見てもらいたい！

・まったりとしあわせ時間を得に・・・友人と知人宅を訪問。おいしい手作りケーキで迎えてくれた。木々に囲まれたお宅の窓辺でいただくものは、また格別です。話も弾み、ありがとうのしあわせ時間。

・網目が細かくてきれいな、先日頂いたメロンは茨城県オリジナルの品種・・・「イバラキンク」。ソロソロ熟してきたので、ナイフを入れた。上品な香り、爽やかな甘さ、皮が薄く肉厚。夫が２人だけで食べるのは、勿体ないと呟いていた。

・フラワーパークに行って来た。まだまだ春バラが見ごろです。大勢の方達が手入れをしていた。それにしても、多くの入園者たち・・・犬連れが多い事。ワンちゃんの入園２００円です。

【６月】

・今月初めころ・・・久しぶりに発熱、久しぶりと言っても、実に30年ぶりです。熱を出さないのが、私の唯一の自慢だったのに残念です。自分は熱が出ないものと思い込んでいた。あまりに咳が出るので、第一病院で診察を受けると、38度超えを指摘された。風邪薬を処方され、それから3日熱との闘い・・・。昨日辺りから動けるようになり、予定のランチに出かけられる程に回復。ランチは、「つながる図書館」内で提供されたもの。日曜、月曜、火曜限定のビーガン料理・・・体にやさしい料理だった。みんなでビーガン料理に関するたくさんの質問を・・・色々教えて貰い、風も癒されたようだった。

・数年前八郷に移住してきたＳさん、梅仕事が出来なくなった梅農家さんから畑を引き継いで三年。Ｓさんから、梅もぎの募集があり仲間と出かけた。すでに10台程の車が止まっており、いつもは静かな畑から歓声があがっていた。梅の種類の説明があり梅干し用に南高梅を10キロ程採った。Ｓさんは田んぼも野菜もやり、借りている藁葺き古民家の修復もかねて茅葺き保存会にも関わり。ゆくゆくは体験農場のようにしたいと以前語っていた。夢に向かって一歩一歩です・・・そうなったら竹細工のワークショップもやりたいなんてことも言っていた‼こちらまでワクワクする梅採りでした。

《子供の頃の思い出》

山中サチ子

病気の父を見舞う

私の幼少の頃、曖昧な表現ですが多分小学生だったと思います。父が胃を患って入院しました。何故、私一人で見舞いに行ったのか思いだせません。病院のドアを開けると、強いクレゾールの臭いが私の鼻を衝きました。暗くて長い廊下を父の病室に向って行きました。

病室のドアをノックすると聴きなれた父の声。中に入ると少し痩せた父がベットに横たわって居ました。『オオ』『よく来たな、一人で来たのか、家に変わりは無いか』私は『ウンウン』と大きく頷きました。

消灯台の上に黄金色に彩く、水飴が壊に入っておりました。恥ずかしながら子供だった私、この水飴に目が釘付けになってしまいました。抽き出しを開け、お箸を一本取り出し、舐めるかと言って箸にくるくると水飴を巻き付け、私に差し出しました。ところが私は不覚にも、その箸を取り落してしまいました。水飴はベチャッとして音をたて、くっつく様に落ちました。

父は突然大きな声で『馬鹿何をやっているんだ』お負けに拳を振り上げていました。私は大慌てで廊下に飛び出し、脱兎の悉く廊下を駆け抜けました。何故なら、父が追い掛けて来るような気がしたからです。病院の裏庭に出ると、海が広がってました。冬の海、どんよりとした鉛色、折角お見舞いに来たのに辛くて涙が溢れて止まりませんでした。

家に帰り、母から父の様子を聞かれましたが、ろくな返事もしませんでした。子供だった私、その理不尽な父の言葉、暫く許せませんでした。やがて大人になった私、その頃の父の気持ちが良く理解出来る様になりました。食べて行くだけでも大変だった時代に病にかかってしまい、心に焦りがあったのでしょう。

今ではクレゾールの臭いのする薄暗い廊下の病院などありません。時が流れたのでしょう、父の亡くなった日も遠い日になりました。本当に日本の国は豊かになったのでしょうか？

日本が貧しかった時代、クレゾールの臭い、父

の思い出、私にとって大切な思い出です。

“ようしようぼう”これごぼう

私が小学生の頃、同じクラスにお人形のようにかわいい女の子がいました。天は二物を与えずなどと申しますが彼女はお勉強などもできるわけです。ですから彼女には、姫というあだ名が付いているのです。放課後のお掃除免除、姫の分を男子の子供がやっているのです。私は、その男子の子達に、こき使われているのです。随分不公平な話だと思いませんか。まだこれぐらいの事なら許せますが、ドッチボールなどをしようものなら私は、運動神経がにぶいからして、ボールをぶっつけられ放題なのです。でもたまたま姫に当たっても、表に出なくて良いルールが出来ているのです。こんなことありだと思いますか。かわいらしいと言うだけで姫は、勝組の切符を手にしているんでしょうか。

私が十八才のころ、此の年頃思春期、心もナイーブなわけです。そんな折の正月、父の弟がふらりとやって来て、私に手招きをするのです。お年玉でももらえるのかと、ヒラヒラと伯父のそばにいってみると、伯父は、私の顔を、まじまじと見て『お前はつくづくブスだな！なんでもいいから最初に声をかけてくれた男と結婚するんだなあ、それでないと一生結婚なんて出来ないぞ』まあ、なんてひどいお言葉、傷つくなー、今はもう亡くなっている伯父、悪くはいいたくありませんが『おじさんだって、あんまりいい男じゃないくせに、人の事だと思ってよく言うよ』でも鏡を見てみると、うなずける点もあるわけですから仕方がないか、結局私は伯父のいいつけ通り、最初に声をかけてくれた人と結婚したわけです。

姫は今頃どうしているだろう、勝組の人生を歩んでいるんだろうか。負け惜しみではありませんが、自分が負組の人生を歩んできたとは、思いたくないのです。

暗らーい思い出

すごく暗い思い出なので書く事に気のりがしません。それは、私の心の隅に、いぼのようにへばりついているのです。それは、自分が何才ぐらいの頃だったか、わかりません。そうとう幼い日の事です。

私は、母と夜汽車に乗っていました。どこへ行くかわかりません。汽車は満員、母と私はデッキの所にいました。小さかった私は、人間の林の中に居る感じ、冬だったのでしょう。みんながぶくぶくと着ぶくれているので、色々な人の臭いが入り混じり胸の奥から、吐き気がこみあげて来るのです。私は、母と離れまいと、しっかりその手を握りしめていました。

ごっつんごっつん、担ぎ屋のおばさんの竹かごが、私の頭を打つのです。『いたい』『いたい』私はその度に、小さな声を、上げました。『おねえちゃん、ごめんよ。こんなに混んでいるんだから、しかたないよな』横目で母をちらつと見て言うのです。こんなに沢山の人が乗っているのに、とても静かなのです。

汽車の音だけが、規則正しく響いていました。汽車が駅に着くたびに、冷たい風が流れ込んで来るのです。駅についても人の流れはいっこうに減らない。ある駅から赤ん坊を背負った若い女の人が乗って来ました。デッキの扉の直ぐそばに立ち、ジッと表を見ているのです。身動き一つしないので、生きている人間のように見えないのです。汽車がうっそうとした茂みにさしかかった時、その女の人は突然、デッキの戸を開けて、暗闇の中に吸い込まれて行ったのです。汽車の中にどよめきが上がりました。私の体の中を、いいしれぬ恐怖が走ったのです。その先、汽車が止まったかどうかわかりません。そして私達は、どこで降りたのか記憶がないのです。後々母にその事を尋ねたのですが『さあーそんな事があったかな』と答えるだけなのです。こんな凄い事を、母は忘れてしまったのだろうか。本当は、こんな事、無かったのだろうか。でも私の記憶の中では、本当にあった事としか思えない。

戦争が終わって、国が貧困にあえいでいた時代、あの女の人は、夫に捨てられたのだろうか。とも貧しさに耐えられなかったのだろうか。それにしても、子供を道ずれに死んだのです。

アルプスの少女ハイジ

富士山の裾野に須走という所があります。そこは夏になると富士の山小屋の灯が点々と灯っているのが見えるのです。しかし、霞が年中かかっている所でもあるのです。

私は、小学校四年生ぐらいの頃、そこに住んでいたのです。軽井沢の様にはいきませんが、雑木林の中に点々と別荘が建っているのです。夏休みに野草の押花を作るため雑木林を歩いていました。一軒の別荘の前を通りかかると、雨戸がきれいに開けはなたれ、ベランダに女の子が椅子に座っているのです。私は好奇心旺盛な女、このままここを通り過ぎるわけにはいかないのです。

茂みの中を中腰になって、そばに近づいて行ったのです。茂みの中から目だけを出して見続けていました。思うなしか顔色が悪く見えるのです。暫く中腰の体制でいたせいか足が痩れてしまい、一瞬立ち上がれませんでした。その時彼女と目と目が合ってしまったのです。女の子は、ちょっと驚いた様子でしたがすぐに笑顔になり、手招きをするのです。

私の好奇心は頂点に達し、彼女に近づいて行ったのです。『近所の人』「うん、そう」『私四年生、貴方は』「私もそう」『どこから来たの』「東京よ」『もう宿題終わった』「まだ」私達は相手を探る様に会話を続けたのです。その時、その子の母親と思われる女の人が、奥から出て来たのです。「あらいらっしゃい。この辺の子」その目はとても優しそうなのです。「この子、一人で退屈していた所なのよ、良かったら遊んでいってちょうだい」そして奥に引っ込み、やがてお皿にクッキーを乗せて持って来てくれたのです。「私が焼いたのよ、どうぞ」私は一つをほおばると、バターの味が、口の中一杯広がるのです。『おいしい』「そう、良かった、沢山召し上がれ」生まれて初めてクッキーなるものを食べたのです。正直な事を言うなれば、クッキーが食べたくて、彼女の所に通うようになったのです。友達を誘って行ってみようかとも思ったのですが、クッキーの取分が、少なくなったら大変、やっぱり一人で行こう、食い意地のはった私、無理からぬ考えなのです。

彼女の所に通い初めて分かった事なのですが、彼女は足が悪いのです。驚きました。これってなにかの物語に似てませんか、そうです。私はハイジ、彼女はクララなのです。私はハイジと違うところは、食べ物に吊られて行っている不純さです。全くお恥ずかしい。クララは、時々ピアノを弾いてくれました。それは聞いた事もない曲なのです。流れるような旋律、うっとりとしてしまうのです。後々音楽好きになった原点は、ここにあるのです。時々宿題も一緒にやりました。クララは、私より少し頭がいいのです。ちょっと悔しいのですが、クララは、足が悪いのだから、これぐらい仕方がないか。そして日にちが流れ、夏休みも終わりに近づいて来た、ある日「私達明日東京に帰るのよ。毎日遊びに来てくれてありがとう」おばさんが突然言ったのです。『えー明日帰るの』「そう、それにこの別荘家の都合で、入手に渡る事になったのよ。だからもうここには来ないの」『じゃーもう会えないの』クララは、黙って遠くを見ていました。「これお母さんに見せて、クッキー焼いてもらいなさい」ポケットから紙を出して手渡してくれました。色々なレシピです。そしてハイジとクララは別れたのです。学校が始まり、時々別荘に行ってみると、雨戸がシッカリと閉じられ、人の気配など無いのです。母は私にクッキーなどは焼いてくれませんでした。

後々考えてみれば、オーブンが無くてはクッキーは焼けないのです。そんな気の利いたものはわが家にはありません。

玉子焼

幼い頃、良く父とかくれんぼをしたのです。夕方父が勤めから帰って来る頃、もっと詳しく言うなれば、父の靴音が聞こえると家の中のどこかに隠れるのです。三間ぐらいしかない小さな官舎、隠れる所などそんなにないのです。幼い私は馬鹿の一つ覚えのように押入れに隠れるのです。父は、わざと見当違いの所を、『サチ子のにおいがするぞ』と捜しまわるのです。押入れの中で「クック」声を殺して笑うのです。やがて押入れの戸が開いて『いたぞ』父も仕事で疲れている事もあり、その時は見つけられるのが早いのです。これは、しばらく儀式の様になってしまいました。ひらたく言うなれば、これは父の優しさなのでしょう。でも、さもありなん、とんでもなく意地の悪い所があるのです。

私は子供の頃から人の飲み残し、食べ残し、絶対にそれを飲んだり食べたり出来ないのです。親といえども例外ではありません。

ある夕食の時に、母が玉子焼きを焼いてくれたのです。真黄色の玉子焼きから、ほんのりと湯気があがっているのです。『うーん、うまそうだな』父は自分の箸をべろっと祇めて事もあろうに私の玉子焼きにベタベタと触るのです。「やめてー食べられない」私は奇声を発しました。すると父は、また箸をべろっと祇めて玉子焼きにベタベタ。

仕方がない、こんな親を持ったのだから玉子焼きは抜きだと悔しげに諦めたのです。すると、母は『父さんいいかげんにしなさいよ』と言って新しい玉子焼きを作ってくれたのです。勿論ベタベタの玉子焼きは、父の胃袋に収まったのです。汚がりの私を教育しなおすつもりだったのでしょうか、いいえ、そうは思いません。単にいじわるなのです。

この汚がりは大人になっても直りませんでした。ところが、娘ときたら、他人の飲み残し、食べ残しは、全然気にしない。

左が妻

右が妻

病で知る　家族の愛情　友人のやさしさ
まわりの人の思い　病気する事がみんな
悪いわけじゃない　頑張れ！

《病床にて》

手紙①

前略突然のお便りびっくりしました。
なんのご病気かわかりません。近ければすぐにでもお見舞いにお伺いしたいのですが、それもならず悔しい思いをしております。私も長い闘病生活、入退院を繰り返しました。でもその中で得した事があります。病んで知る、家庭の愛情、友人の思いやり、まわりの人たちの親切、病気する事が全部悪いわけではないのです。そして自分を良く見つめる事ができます。頑張ってください。また必ずお会い出来る日を楽しみにしております。

平成 21 年

平成 21 年、サチ子作
（椿がすきだった）

手紙②

暦の上では立冬、やはり朝晩は寒くなりました。私も少し筑波大学病院に入院しておりまして、貴女からのお手紙、退院してから拝見した次第でございましてご返事が遅くなり大変申し訳ございません。貴女様のご病気あまり良くわかりませんが、いまはすぐれた薬が出ております。
少し面白いお話いたします。入院中、外出届けを出しまして娘と二人西武に遊びに行きました。寄らなければ良いのにマキさんに寄ってしまいました。言わなければいいのに自己顕示欲強く、「私、二代目の庖長だったんだ」なんて言ってしまいました。存じ上げております山中庖長、横沢庖長にすごい人だったと聞いております。私一俣が出そうなほど嬉しく聞いてしまいましたD
娘の策略に乗ってしまい、「葬儀用の黒パールが欲しい」まんまと２５万円指輪とセットで買ってしまいました。明日からはお茶漬けの世界だなと思いました。西武も凄く変わってしまいました。時の流れですね。でも貴女と働いていたあの時代は忘れるわけにはいきません。
苦しい事も多かったけど楽しい事もいっぱい、素敵な日々でした口これからはますます寒い日が続きます。どうぞお身体ご自愛下さい。またお便りします。

手紙③

暦の上では立冬、朝夕寒くなりました。多美子はつくば市に住所を登録している為に、お手紙戻ってしまったのだと思います。それをわざわざお持ち下さり感謝致しております。折あしく出かける所で、お茶も差し上げずに申し訳なく思っております。
又、心暖まるお便りありがとうございます。多美子は素敵なお友達をもったなと、しみじみと思いました。人生の醍醐味は出会いだと言う人がいますが、まさに本当ですね。これからも良い交友関係を続けてあげて下さい。どうぞお近い内にお遊びにいらして下さい。
あの子も私の体を心配して水曜日に家に戻っておりますのでお待ちしております。
すます寒い日が続きますのでお体をご自愛下さい。
又お便り致します。

〈後記〉

本山中サチ子さんは風の会新会員である「ヤマナタサダオ」の奥様で、平成２２年９月に６４歳でお亡くなりになりました。ここに生前に残された随筆を載せます。次回にも続きます。

水雲問答　（２）　（木村　進）

【はじめに】

松浦静山　甲子夜話　巻３９【１】より

これは江戸時代の（長崎）平戸藩の藩主であった松浦静山公が晩年の２０年間に毎日書き残した随筆集「甲子夜話（かっしやわ）」の中に挿入されている２人（水・雲）の手紙による問答集を理解しようとする試みです。

（５）　人を知りて委任

雲：

徳義の幣は述情に陥り、英明の幣は叢脞（そうざ）に成申候。人君は人を知りて委任して、名実を綜覈（そうかく）して、督責して励すより外、治世の治術は之れ有るまじくと存候。

（訳）

徳義（人として守るべき道徳上の義務、ここでは過ぎた施し）の弊害は、これに片寄ると情に溺れてだらしがなくなってしまうことであり、これにたいし英明（頭のよい）の弊害はいろいろ事細かくうるさくなってしまうことです。上に立つ人君は、よく人を知って、その人に委任し、名実（名と実体）を照らし合わせて、よく督責（厳しく吟味）して励ますより外に治世の術はないと思います。

水：

名実綜覈(そうかく)、人を知て委任するの論、誠に余蘊（よううん）なく覚え珍重に存候。

（訳）

名実をよく照らし合わせ、人を知って、その人に委任するという論は、誠に不足が無く結構な意見であります。

（コメント）

上に立った人は、一人で何でもできると思わずに、部下やその他の人材の名実をよく吟味して、理解し、その上で、その人に委任することは大切ですね。水雲問答（5）　人を知りて委任

これは江戸時代の（長崎）平戸藩の藩主であった松浦静山公が晩年の２０年間に毎日書き残した随筆集「甲子夜話（かっしやわ）」に書かれている２人の手紙による問答集を理解しようとする試みです。

（６）　人材（一才一能）

雲：

人材の賢なるものは委任して宜しくそうらえども、その他の才ある者、あるいは進め、あるいは退けて、駕御（がぎょ：馬を乗りこなす）鼓舞するの術ありて人を用いざれば、中興（復興）することは能わざることと存候。時によりて張湯（ちょうとう：長安の役人）、桑弘羊（そうこうよう：武帝に貢献した人物）も用いずして叶わぬことも有るべからずに存候。

（訳）

人材も賢なるもの（見識と度量を兼備した者）には委任してもよろしいが、その他の才能だけある者に対しては、時としては任用し、ある場合には使わないというように、それら人をうまく制御するように用いなければ、衰えた国運を再興（いわゆる中興）することは出来ないでしょう。それでも、時と場合によっては張湯（ちょうとう：長安の役人）、桑弘羊（そうこうよう：武帝に貢献した人物）のような曲者でも、用いなければならないことがあるのでしょうか。

水：

一才一能もとより棄（すつ）べからず。駕御その道をする時は、張桑（張湯も桑弘羊も）用ゆべき勿論に候。然れども我は駕馭仕（かぎょし）おほせたりと存候て、いつか欺誑（ぎきょう）を受け候こと昔より少なからず候間、小人の才ある者を用候は、我手覚なくては、妄（みだ）りには許しがたく候。

（訳）

一才一能（一つでも優れた能力のある）の人材も、時によっては必要ですから見棄てることはできません。

馬を乗りこなすように人を制御できる時は、張湯や桑弘羊のような者でも使わなければならないことはもちろんありましょう。

しかし、自分は思うように人を使うことが出来ると思っていても、いつの間にか欺誑（ぎきょう：まんまとハメられていた）ということは、昔からよくあることですから、小人のような能力の者を用いるには、よほど腕に覚えないと、好き勝手に行うことは危険となりましょう。

（コメント）

論語には「君子は和して動ぜず、小人は動じて和せず」という言葉があります。

ここで言っている「君子＝徳の高い人」「小人＝だめな一般人」くらいの意味かと思います。

また、「和して動ぜず＝人と調和して仲良くできるが、何にでも賛成することはない」
「動じて和せず＝何にでも賛同してしまうが、調和できない」との意味でしょうか。

ここでは国を統治する上に立つ者は、
小人をどう乗りこなして（操縦して）使っていくかが難しいが、必要だ
といっているのだと思います。

（7） 唐中興の宰相（さいしょう）

雲：

歴代の宰相のうち、唐の李鄴（りぎょう）侯の事業、誠実にして知略あり。進退の正を得たる所（ところ）甚（はなはだ）欣慕（ごんぼ）仕（つかまつり）候。

季世の宰相は鄴侯（ぎょうこう）の如くになくば禍を得申し候て、しかも国家の軍を敗（やぶり）申し候ことと存じ候。『鄴侯家伝』と申す書は今は有り候や伺（うかがい）候。

（訳）

中国の歴代の宰相のうち、唐の李鄴（りぎょう）侯のやられた業績は、誠に誠実で知略があります。進退のタイミングを得たところは、まことに嬉しく慕うところです。季世（これからの世）の宰相（さいしょう）は、鄴侯（ぎょうこう）のようでなければ禍が生じ、しかも国家の軍を敗退させていたでしょう。『鄴侯家伝』という書は今ありますでしょうか。

水：

鄴公の論は同意に候。この人は一つとして誹（そし）るべきなし。ただ陸宣公と時を同じくして、ついに宣公を用いざること疑いの一つにそうろう。古人の論もこれに有りやに覚えそうろう。されば今も昔も同じことにて、そのときの模様、のちの評と遥かに違いたることも多かるべし。やむを得ざる次第もこれに有るや。『家伝』は亡き書と聞こえ申しそうろう

（訳）

鄴公（李鄴侯）の論は同意です。この人は一つも非難するべき点がありません。ただ、陸宣公（りくせんこう・・・陸贄：りくし）と時代は同じであるが、唐はついにこの宣公を用いることが無かったのは問題の一つであろう。ただ、昔の人のことであるから、そのときの情勢などを後に評するのは違うことも多いと思う。やむを得なかったこともあったのであろう。

「家伝」については蔵書には無いと聞いている。

（解説）

この唐時代の書物は、日本にはあまり伝わっていないようで、なかなか理解するのが難しい。

概略を調べると、中国は7世紀始め、隋の国家が乱れると、李淵（李氏）が挙兵して隋をほろぼし、煬帝を太上皇に祭り上げたが、煬帝が殺されたため、李淵は自ら即位して６１８年に唐が建国された。その後国内の反対勢力などを李淵の次子の李世民が滅ぼして勢力を握り、６２６年にクーデターを起こして長男で皇太子の李建成を殺害して実権を握った。李世民が唐の第2代の皇帝・太宗（たいそう）となり実質的な唐の繁栄が始まった。この李世民は広い人材登用で官制の制度をつくり卓越した人物といわれている。

しかし、唐は一度６９０年に王朝が廃され、その後７０５年に復活したが、この頃（中唐時代）はかなり力を落としていた。

その時代に出てきたのが、やはり李氏の李鄴（りぎょう）：李泌（りひつ）（722 - 789 年）である。

李泌は陰に隠れた人物であまり表立って紹介されることは少ないようだが、ここではかなり李泌を買っているようだ。

李泌は生涯を通じて4度朝廷からはずされ、野に隠れていたところを4度朝廷に呼び戻されて、その都度重要なポストについている。人物評としては軍事、政略の両面に優れた才能を持ち、とくに身分などにはこだわらず、私利私欲がなかったといわれている。

そのような時に、節度使、安禄山らが起した「安史の乱（755～763）」により唐の玄宗皇帝は一時長安から逃れ、滅亡寸前に追いやられた。玄宗に代わって即位した粛宗が10年も官職から遠ざかっていた李泌を探しだして賓客として迎え入れた。

当時唐の粛宗も吐蕃（とばん：チベット）族との対立もあり、ウイグル族とも仲も悪かったが、李泌は最後の2年間、宰相となり、このウイグルとの和平にごぎつけ、このウイグル族の助けにより唐の滅亡を防ぐことが出来たといわれている。

鄴侯家伝（ぎょうこうかでん）は、唐の役人李繁（リー・シェン、京兆府(現西安)人。唐の政治家）が無差別殺人の罪で、投獄され、獄中で死ぬ間際(829 年）に書いた書物といわれている。（恐らく唐の李氏の家伝を纏めた書であろう。）

（続く）